

25
新編

913
ツ



913
ソ

追遠会

一冊

湯淺四郎氏寄贈
173

豫知県文化会館
昭 35.2.16 和
51001

小島在經
A913
ソ

圖書部
栄
富

今茲孟冬芭蕉公羽る九十
四一連日也能道好古等
和禱以平山有公羽る禱書卜
日得遂為正式舍前以風
月堂有公羽る志路其文中

所謂夕是矣之家之祀為翁
之門人也依累世於茲有批
之聖上崇祀為主各之款白
著昔以自聖主人亦在座即
乞得延中之句之為中之之亦
禱序予予因齋數禱與

之時

至保十四年歲次癸卯十月中
游見位東於廟社多
書予之在室中



床懸物

書林風

...

...

...

いさむす

...

...

丁卯臘月初

夕乃何...

催主

而后

黄山

樵鳥

芝石

宗也

月底

服宗也

鶴叟

不轉

初座執筆

鵬居

後座執筆

一清

讀者

應知

香

露井

花

我竟

座見

金樵

執筆

梅裡

李裳

花器

古銅經筒

梅寒菊

天保十四癸卯十月二日於

東輪寺具書

俳諧之百韻

美野之音も此や藤花を乳

目は四女好まじも代

新籠み大根越るも交々

ゆゑもささるるは禁花に瑞

降るや下さるはさる西風

月見もよも葉花新のさ

悔も志もは好れ好れ喰はれ

手早ふつるは朝の甘平

桃鳥

沙鷗

石后

菱山

芝石

我竟

旭漳

松より歩保ふ草に露花を
重権

横筋をよみよ身は流る
鳥津

つらみよん子松のよと南風
梅裡

借り忘れ給へ度あひきり
李噴

久松をよみよ平よ本藤花
鴨居

玉子の産也。露花松の
慈知

思ひ建ひし旅歌。家も同じ
一清

よみよ松花々々よみよ
露井

はさよよよよのあまふ力の次
鶴奥

よみよよよよよよよよ
李蒙

東端よよよ三時よ花四も
米嶺

汝我留よよよよよ
蓬坊

おの信よよよよよねあ場
不轉

ふ髪つよよよよよの
思文

よみよ初よ竿の扱ひねよ
牧子

海よよよよよ温泉の峯
百鳥

桂の木のあふるを忘れたる裸宮

一桃

鹿野産錢の如くして

青白

地味よりと越に那の言持く

農守

けりち皆を此解めたる

醉雨

支例れ坊者の中一人通る

妻美

くらく聲傳へぬ板の音

馬勒

すいくと痛む根をたつをき際

る妻

得る場とす猿のたつと

梧由

さし申しあふにけりる唐のうら

鳩泉

激れるわらき一層れ浪

草涯

初初なる名力をけりて

月底

持ていせむ程刈き銭を

有秀

好まきほほあはれぬをけ

砂流

煙のあはる連城り

竹屋

氣さるる秋のうら清の蠅

九山

茶屋の基はれ清の涌る

黄山

トモシロハシラシラシラシラシラ

露井

ハシラシラシラシラシラシラ

不博

ハシラシラシラシラシラシラ

李裳

ハシラシラシラシラシラシラ

牧子

ハシラシラシラシラシラシラ

蓬飴

ハシラシラシラシラシラシラ

不桃

ハシラシラシラシラシラシラ

思文

ハシラシラシラシラシラシラ

農守

火ノヒキク湯ニ春セカ所アリ

百鳥

夏ノコウ研ニ糞丸キレ味ナ

夏矣

いんこ自今ハ新耳ト云

喜白

隣ノヤウヤウおふ久峯

百妻

裂ケル此脂丸るも松の幹

醉る

ねろー西ノ我味ニ形鳩

鳩巢

吹あやの影よ押しく侍る

馬勒

つく息ふく水ノ在衆

月底

泣きよ死神のけり言はるる
 うるは紙に火をくはるる
 丸布に仕口をくはるる際
 花のちるるを枯木の之
 片角城落しとく塵に起す
 咽に乾きもやとわく
 奉り初めの足智と居る株角
 年祿のるるあはれ相見
 梧由
 砂流
 草涯
 丸山
 有秀
 梅岡
 孫助
 柳島

地の子に懐きちひされ地根おそ
 といひ費目れとる肥後米
 大小平糸織織のまよふ
 境城た〜〜埋葬の池
 一群よま〜〜のよる山鳥
 某師のあき〜〜音れら〜〜
 涙にそそれ表を〜〜あり
 仁助ま〜〜と臺所の夢
 竹屋
 石后
 茨山
 芝石
 我竟
 旭漳
 重樵
 鳥居

成刻より亥刻至今夜程のり

梅裡

辰刻より酉刻のり

李廣

液程の朝より夕まで終世極

鷗居

早う在竹後のかきす

齋ち

方角をもるは逆と合ふより

一清

いそぎ敷紙照るは煙臺

露井

耐の障あさりの縁は関は向

鶴奥

往來と見のりやく

雪裳

北葉より南偶の改のつらさ

半嶺

此よりらへるは清く空

蓬宿

さゆり花をさへるは月夜

月底

やうに縁よむは月夜

執筆

此縁起のつらさよまのり出づるのり

やうに初表はむは月夜

はるのりよるは月夜

やうに社喜のりよるは月夜

)

音つて度とけしつ小春の柳曳

梅間

水度此等も少く浮少春を子

重樵

空つて身在れ門の少けと乳

梅裡

渡し留の行旅とれり小春を女

牧子

ふんつてこの少くも少春は

有秀

横し舞つてや小春の聲は保

鶴豊

二三之度も今頃通す枯葉を
竹筥上口のくちね杭等も
第山残句のくちね杭等も
思文 而后 竹筥

水仙や表つゆの層連舟
飛人ハ庄敷上層の中は花
一桃 鴨居

草つゆの家五六軒を木立
庭の吹風 風や冬木立
門先も畑上望み中 冬木立
草花の道なきや冬木立
石橋 砂流 竹漣 草矣

つれづれうちよもいふは
る豆の樹も春もあはれ
蓮湯 春白

鴨啼や峰のほとり

九山

野のほとりのおもひ

梧由

葉火さくや小鴨のり

る鳥

日の初まはる

鳥津

煙さくさくさる

黄心

根をさるや

半嶺

多岐くさくさ

桃鳥

葉のほとり

農守

松杉枝をたぐ

鳩原

あけぼの

鳥勒

跡をたぐ

露井

炭や

旭漳

海

言はれぬ春のさかひあはれ

我竟

笑はばやあはれもや冬椿

月底

と唄や切草の下の露の南

醉る

氷の夜や河のほとり湖の空

芝石

と唄やあはれもあはれ柿畑

一清

塩初梅のさかひあはれ
あはれもあはれ

進知

柘桂の葉の初はる塩の平香の上

李慶

旅籠屋の葉の初はる塩の平香の上

李慶

今とてはる初はる水仙花

孫助

追加

権は葉の陰もしこれのやうなる歌
 多枝やあまの言ふ山嶺のうら
 傾きよれとくささるるあつちのうら
 有啼 第のりのあやうささるる
 多のうらや坂城のうら井のうら
 庭推 治 荃涼 泥牛 鍵吉 少年 陸李

尾陽書肆

名古屋本町を丁目

風月堂



愛 知 県



1103267896